

英語の複合不定代名詞の史的発達

藤 原 保 明

I. まえがき

現代英語の *any*, *some*, *every* などの数量詞(quantifiers)が不定代名詞 *one* と複合または共起する場合、いくつかの制約を受ける。すなわち、*one* は *any*, *some*, *every* と結合し、*ányone*, *sómeone*, *éveryone* という複合代名詞を形成し、さらに、*one* は *any* と *every* と共にし、*àny óne*, *èvery óne* という代名詞句を形成するが、その他の数量詞とは複合も共起もしない¹。現代英語の数量詞の生起に関するこのような制約は、中英語期から今日に至るまでに大きく変化した。すなわち、古英語の数詞 *ān ‘one’* の強形から不定代名詞 *oon* が生じると、*many oon*, *echoon*, *everichoon* という句や複合語が発達していく。しかし、中英語で好まれたこれらの代名詞は徐々に衰退し、現代英語では完全に消滅している。その一方では、*anyone*, *everyone*, *someone* という全く新しい複合語が登場し、これらと同じ意味を表す *anybody*, *everybody*, *somebody* という複合語も発達していく。もっとも、このような複合不定代名詞についての発達過程はこれまで詳しく記述されたことはなく、*one* の史的発達を詳細に記している Rissanen(1967) も13世紀以前の *one* を対象としているにすぎない。One そのもののさまざまな意味合いや機能はかなり早い時期に発達したと思われるが(Rissanen 1967:1-13), 数量詞と *one* が複合または共起し、興味深い言語特徴を示すようになるのは14世紀以降のことである。それゆえ、本稿では後期中英語期と初期近代英語期における数量詞と *one* の複合と共に起の過程に焦点を当て、意味と形式の両面から考察したい。

II. 後期中英語における数量詞と *one* の複合と共に起

本稿において分析対象とする中英語の文献は、後期を代表するチヨーサーの『カンタベリ物語』(*The Canterbury Tales*, 以下, CT と略す), ラングラン

ドの『農夫ピアズの夢』(*The Vision of William concerning Piers the Plowman*, 以下, PPと略す), マンデヴィルの『旅行記』(*The Travels of Sir John Mandeville*, 以下, MTと略す)の3点である。CTは一部に散文体で書かれた部分を含むが, 大半は弱強5詩脚という形式に忠実な脚韻詩であり, ロンドン方言で書かれていること, 一方, PPは頭韻詩であり, 西中部方言で書かれていること, さらに, MTはHertfordshireの写字生によって書かれた散文であり, フランス語原典からの翻訳である。それゆえ, これらの文献は成立年代は近いものの, 詩型や方言, さらには他言語による干渉の有無などの相違がありうることから, 数量詞やoneの用法などにもこれらの相違が反映されている可能性があり, その意味において格好の文献であるといえよう。

2.1.1. CTの数量詞

この節では, CTで用いられている数量詞のうち, ech, everich, every, many, muche, muchel, som, anyが代名詞のoonと結合または共起する場合, どのような特徴を示すかを明らかにしたい。なお, 分析結果は藤原(2004a, 2004b, 2006)に詳述されていることから, ここでは具体例をあげず, 概要を提示するにとどめる。

2.1.2. Ech, everich, every

Echの強調形æfre + ylc 'ever each'からeverichが派生し,ついで, everichが縮約してeveryが出てきた。*Middle English Dictionary*やBenson(1987)などはeverichはeveryの異形であり, これらの二語とechは別の語であると考えているが, Skeat(1894)はこれら三つの語は別々であるとみなしている。しかし, CTの場合, echとeverichの意味と用法は類似しているが, everyは両者とかなり異なる特徴を示す。具体的には, echとeverichは代名詞と決定詞のいずれにも用いられるが, 代名詞の用法が勝っていて, 全体の7割以上を占める。さらに, 両者は代名詞oonおよびa(n)+単数名詞と複合または共起する点でも共通している。一方, everyはechやeverichの4~5倍の頻度, すなわち291例(韻文中に231例, 散文中に60例)が用いられているが, これらはすべて決定詞として用いられていて, 代名詞の用法は全く見当たらない。さらに, 決定詞としてのeveryはdeelとwhereと複合することがあるが, oonと複合することではなく, また, a+単数名詞を修飾することもない。

2.1.3. Many, muche, muchel

多数・多量を表す muche, muchel, many の場合, many は a(n) + 単数名詞と oon を修飾するが, muche と muchel にはこのような例はまったく確認できないことから, many は加算名詞を修飾し, muche と muchel は質量名詞 (mass noun) を修飾するという原則は確立しているように思われる。

2.1.4. Som, any

少数・少量を表す数量詞のうち, som 'some' (216例) の大半は決定詞であり, 代名詞はそれほど多くはない。決定詞の som は deel, thing, time, what, wher とはしばしば複合語を形成するが, oon とは複合することも共起することもない。一方, any (211例) は自由選択の意味を強調する文脈や, 疑問, 条件, 否定という文脈において規則的に用いられ, 現代英語の any と似た統語的・意味的特徴を示す。Any は 1 例のみ where と複合するが, oon と複合または共起する例は全く生じない。この点において, CT の any は現代英語の any と決定的に異なる。

CT では every, som, any は oon と複合せず, 共起することもないが, Mustanoja (1960:211, 259-263) や Rissanen (1967:1-13) が指摘しているように, som, any, an (=oon) は古英語期以降, 個別を表す不定冠詞としても用いられ, チョーサーの頃もこの機能が維持されていたことから, 同じく個別を強調する働きのある oon との複合や共起は許されなかつたと推測される。もっとも, 他の中英語の文献では any と oon との共起・複合例は若干見られることから, この問題はさらに検討する必要がある (Rissanen 1967:259-260)。

2.1.5. 'Many a ~' 型の配分用法と oon との関係

'Many a ~' 型の配分用法に対応する many oon / echoon / everichoонについて, Skeat (1950), Baugh (1964), Benson (1987) は 'many a one', 'each one', 'every one' という解釈をそれぞれに与えている。このうち, many a one という形式の名詞句は CT では用いられておらず, また, a one という名詞句は少なくとも現代英語では修飾要素 (modifier) が介在しなければ一般には許されない (Declerck 1991:289; Swan 1995:392)。一方, one は 'man, thing, year' などの単数加算名詞を表す可能性があるが, 既出の名詞(句)と照応していることも考えられる。したがって, 以下では 'many a ~' 型の 3 種類の配分用法と, これらに対応する many oon / echoon / everichoон という形式の関係を

明らかにしたい。

2.1.5.1. 代名詞 oon の機能

Oon(171例, 韻文中に136例, 散文中に35例)は代名詞または決定詞として機能しているが, このうち, 代名詞用法の大半は既出の事柄や概念に言及する前方照応的な(anaphoric)支柱語(prop-word)であり, 旧情報(old information)を導入する場合に用いられている。一方, oon に照応関係が存在しない場合はきわめて少なく, 3例のみである。これらはいずれも文脈から「ある人, だれか」(someone, somebody)を意味することが明らかであることから, 新情報(new information)を担っているといえる。

2.1.5.2. Many oon, echoon, everychoon の機能

そこで, 次に数量詞と複合または共起する oon について考察したい。最初に, many(19例, 韵文に18例, 散文に1例)の大半(15例)は先行する名詞(句)を受け, しかも many oon は主要語である名詞(句)を限定する同格または並列語(句)(appositive)となっている。もっとも, 同格語(句)の数(number)は名詞(句)の数と一致しないこともある。部分属格を従える2例を加えると, 19例中17例は前方照応的な支柱語であり, しかも, 詩の行末にのみ生じるという顕著な特徴を示す。一方, 残りの2例のうち, 1例は韵文の例にもかかわらず行末以外の位置に生じ, 他の1例は散文体の部分に生じていることから, これら2例は一見したところ例外のように思われるが, 他の17例とは異なり, 'many a man' という意味を表し, 既存のいかなる名詞句も受けない新情報を用いられている。したがって, CTの19例の many oon に関する限り, 「oon は, 詩の行末に生じると旧情報を担うが, その他の位置では新情報を担う」という一般化が可能となる。次に, everychoon(30例)と echoon(9例)はすべて韵文の行末に生じ, 前または後に生じる名詞(句)と照応関係にあり, 旧情報を担っている。したがって, many oon のみならず echoon, everychoon にも「詩の行末に生じると旧情報を担う」という一般化が当てはまる。

2.1.5.3. 詩的許容について

ここで, many oon などの三つの形式が旧情報を担うと, 行末に位置するのはなぜかという疑問について考察しておきたい。これらの形式は既出の名詞(句)を強調するために用いられていることから推測すると, 先行する行末のラ

イム(rhyme)に合わせるために、これらの代名詞を次の行末に用いた方が、これとは逆の場合よりも自然であるように思われる。そこで、前者のような場合を無標(unmarked)の脚韻、後者のような場合を有標(marked)の脚韻と呼ぶ。そして、many oon(17例), echoon(9例), everichoon(30例)のそれぞれが無標または有標のいずれの位置に生じるかについて分析した結果、(1)に示したように、many oonとeverichoonは頻度差が逆転しているものの、全体としては無標と有標の頻度はほぼ同じであることが明らかとなった。したがって、チョーサーは脚韻の必要をまかなうためにmany oonなどの三つの形式を行末に置いたのではなく、個別の多さを強調するために、行末という最も卓立した位置を選んだと思われる。このように考えると、旧情報を担う同じ形式が行中や散文中で用いられないことの説明も可能となる。

(1)

種類	位置	無標	有標
manyoon		4	13
echoon		5	4
everichoon		20	10
合 計		29	27

2.1.5.4. 'many a ~'型の配分用法

次に、「many a ~」型の配分用法の分布と情報の関係について考察したい。これまで取り上げた many a + 単数名詞のすべての例を分析したところ、いずれも新情報を導入する場合に用いられていて、照応関係は認められず、行中および文中で占める位置についても制約はないことが明らかとなった。

2.1.6. まとめ

CTでは、(2)に示したように、「oonと複合ないしは共起しうる数量詞は‘many a ~’型の配分用法が可能な many, everich, ech に限られ、その他の数量詞 any, every, som にはこの種の複合も共起も許されない」といえる。この結論が中英語の他の文献に当てはまるか否かが今後の課題となる。

(2)

	oon	a/an + 単数名詞
many	+	+
everich	+	+
ech	+	+
every	-	-
som	-	-
any	-	-

2.2.1 PP の数量詞

PP は CT とほぼ同じ時期(1377年頃)に作られたが、脚韻詩ではなく、頭韻詩であり、しかも、西中部方言で書かれていることから、CT と比較するには格好の文献である。この頭韻詩には 3 種類の写本が現存するが、今回は最も評価の高い B テキスト(7303行)からデータを抽出することにした(Kane & Donaldson 1988)²。

2.2.2. Ech, every

Ech(61例)の大半(=56例)は(3a, b, c)のような決定詞であり、(3d, e)のような代名詞用法は 5 例にすぎず、CT とは正反対の比率を示す。

- (3) a. And dyngen vpon Dauid *eche* day til eue;
 ‘And strike David every day till evening,’ (III. 312)
- b. I wolde þat *ech* wight were my knaue. (V. 117)
- c. That *ech* a creature of his court welcomeþ me faire.’ (XV. 21)
- d. For al is but oon god and *ech* is god hymselfe: (X. 246)
- e. Han Officers vnder hem, and *ech* of hem a certain.
 ‘Have retainers under them, and each of them a fixed number’ (XX. 258)

Everich は他のテキストにも全く生じないことから、この詩人の方言ではすでに消滅していたと推測される。一方、euery はきわめて少なく 10 例にとどまっている。いずれも(4)のように決定詞の用法のみであり、このうち 6 例は(4b)のように man を修飾するが、every が他の語と複合する例は全く生じない。

- (4) a. And lene folk þat lese wole a lippe at *euery* noble.
 ‘And (I) lent money to people who wish to lose a portion at every

- coin.'
- (V. 247)
- b. For wel may *euery* man wite, if god hadde wold hymselue,
(XV. 263)
- c. *Euery* bisshop þat bereþ cros, by þat he is holden
(XV. 570)

2. 2. 3. Many, muche, muchel

*Many(e)*は(5a, b, e)のように、22例はa+単数名詞を修飾するが、*muche*と*muchel*にはこのような例は全く見当たらないことから、*many*は加算名詞を修飾し、*muche*と*muchel*は質量名詞を修飾するという原則が確立していると思われる。*Many*はさまざまな名詞を修飾するが、*oon*を修飾する例は全くなく、他の語と複合する例もない。

- (5) a. And have ymaad *many* a knyght bothe mercer and draper
'And (I) have made many a knight both cloth-merchant and cloth-dealer'
(V. 251)
- b. And er the commune have corn ynough *many* a cold morwenyng;
'And before the common people have enough food many a cold morning;'
(XIII. 262)
- c. *Manye* monthes with hem, and with monkes bothe.
(V. 154)
- d. And þo þat wisely wordeden and writen *manye* bokes
(X. 434)
- e. *Manye* a lovely lady and [hir] lemmans knyghtes
(XX. 104)

決定詞の*muche*(34例)と*muchel*(4例)は、(6)のようにいずれも同じ名詞を修飾していることから、両者には明確な区別はなかったと考えられる。

- (6) a. And for his *muche* mercy to amende [vs] here.
'And by virtue of his great mercy to restore (us) to grace here.'
(X. 126)
- b. But for þi *muchel* mercy mitigacion I biseche:
'But for your great mercy I pray for the grace of leniency.'
(V. 469)
- c. Ich haue *muche* merueille of yow, and so haþ many anoþer,
'I have a great wonder at you, and also many other persons have,'
(XI. 75)
- d. *Muchel* merueille me þynkeþ; and moore of a sherewe
'It seems to me a great wonder; and more of a wicked (one)'

(IX, 153)

2.2.4. Som, any

Som は決定詞が62例、代名詞が58例あり、用法による頻度差は大きくはない。決定詞の som はさまざまな加算名詞を修飾するが、oonなどの不定代名詞を修飾する例はない。また、som は del, tyme, what とは複合するが、その他の語とは複合しない。Some または somme という -e で終わる形式は、(7a, b) のように、規則的に複数名詞に対応するが、無語尾の som は (7c, d) のように単数名詞に対応するとは限らない。

一方, *any*(93例)のうち, 2例は(8a, b)のように代名詞用法であるが, 他の91例はすべて決定詞である。したがって, 用法間の頻度差は *som* の場合とは大きく異なる。決定詞の *any* は *oon* などの不定代名詞を修飾することも, 他の語と複合することもない。*Som* の場合と同様, 語尾-*e* を伴う形式は(8c)のように複数名詞を修飾するが, 無語尾の *any* は(8d, e)のように単複いずれの名詞も修飾し, *som* と同じ特徴を示す。

- (8) a. Fals or Fauel or *any* of his feeris
 ‘Fraud or Guile or any of their companions’ (II. 194)

b. Huntynge or haukyng if *any* of hem vse
 ‘If any of them practise hunting or hawking’ (III. 313)

c. ‘Haþ he *anye* rentes or richesse or any riche frendes?’ (XV. 176)

d. If *any* Mason made a molde þerto muche wonder it were.
 ‘If any Mason made a mould for that purpose, it would be much
 wonder.’ (XI. 350)

- e. And if I telle *any* tales þei taken hem togideres, (V. 172)

2.2.5. ‘Many a ~’型の配分用法とoonとの関係

2. 2. 5. 1. 代名詞 *oon* の機能

Oon は異形(o, oo, on, one, oone, ones, oones)も含め、数詞、代名詞、副詞として用いられる。このうち、代名詞の oon(25例)は、(9a)のように *of-phrase* を従える場合が最も多いが、(9b)のように属格・複数形を伴う場合や、(9c)のように既出の名詞(句)を受ける場合に用いられることがある。これらの用法は CT の場合とよく似ている。

2.2.5.2. Echoon の機能

Many(155例)の大半は決定詞であるが, oon とは共起しない。一方, ech と one が複合した echone(11例), および, ech と one が共起した ech one(1例)はいずれも(10)のように行末に限られる。なお, echone という複合語と ech one という句は, (10c, d)の例を見る限り, 区別はないように思われる。Echone の分布に関して, 頭韻詩の PP が脚韻詩の CT と全く同じ特徴を示すというのは, 「one を主要語とする複合代名詞や不定代名詞句は脚韻の必要をまかなうために行末に位置しているのではない」という2.1.5.2.の仮説を立証することになり, 注目に値する。

2. 2. 5. 3. ‘Many a ~’型の配分用法

Many a + 単数名詞という配分用法は(11a, b)を含め、20例にすぎず、作品の規模を考慮しても、CTの韻文中の145例とは格段の相違がある。一方、(11c, d)のような ech a + 単数名詞という形式は23例用いられていて、many a + 単数名詞の例はもとより、CTの ech a + 単数名詞の9例を大きく上回っている。なお、euerich という語形は PP には存在しないことから、euerichone や euerich a + 単数名詞という形式は生じない。

2.2.6. まとめ

PP の場合、配分用法は many と ech に用いられているが、これらに対応する one を主要語とする形式は(12)に示したとおり、複合語 echone と不定代名詞の ech one のみである。

(12)

	one	a/an + 単数名詞
many	-	+
euerich		
ech	+	+
euery	-	-
som	-	-
any	-	-

2.3.1. MT の不定代名詞

MT は CT や PP と時期的に近く、散文であること、さらに、作品の規模がかなり大きいことから、一般化するのに十分な量の例が得られる可能性が高い。今回用いたテキスト (The Cotton Version) は 15世紀初頭の Hertfordshire の写字家の手になるが (Seymour 1967:xiii-xxi)，フランス語原典からの英訳であることから、当時の英語が忠実に反映されていない可能性があることが想定される。その反面、同時代に英語で書かれた他の文献と比較してどのような差異が生じるのかという興味もある。

2.3.2. Ech, euerych, euery

Ech, euerych, euery のうち、最も新しい語形 euery は圧倒的に多くて 98 例、最も古い形式 ech は 10 例、中間的な語形 euerych は 22 例である。Ech の例は予想を若干下回るが、euery と euerych の生起頻度は CT の場合とほぼ同じである。CT の場合と同様、ech と euerych には (13) に示したように決定詞と代名詞の用法があるが、euerych の決定詞としての用例は少なく、(13e) を含めて 2 例のみである。もっとも、euerych の絶対数が多くないことから、この頻度差は無視してよさそうである。

- (13) a. and in *eche syde enclosed with gode dyches.* (IX 50. 22)
- b. And yif *ech* of you loue other and helpe other, (XXIV 165.12)
- c. And also *euerych* of hem bereth an ox of gold (XXI 143. 35)
- d. *Euerych* hath his hous, bothe man and woman (XXVI 178. 13)
- e. thei schulle growe *eueryche* yeer, (XVII 116. 11)

注目に値するのは euery の代名詞用法である。すなわち、98 例の euery の大半 (= 83 例) は (14a) のような決定詞であるが、(14b, c, d) のような代名詞用法が 15 例も生じることである。これらは例外として処理できるほど少なくないこと、euery の代名詞用法は CT と PP には全く用いられておらず、現代英語でも認められていないことから、この特異な用法の由来を解明せねばならないが、フランス語原典の干渉の有無は今後の検討課題としたい。

- (14) a. And thanne *euery* man boweth his hed toward the erthe. (XXV 169. 18)
- b. be the whiche *euery* of hem vnderstondeth other. (XXII 148. 7)
- c. and *euery* of tho kynges han many kynges (XXV 175. 2)
- d. and *euery* of tho cross ben sett (XXX 198. 18)

2.3.3. Many, moche, mochel

Many, moche, mochel には(15)のように決定詞と代名詞の用法があるが, many は加算名詞に対応し, moche と mochel は質量名詞に対応するという原則はこの詩においても確立している。Moche と mochel は, (15c) と (15e) のように同一の名詞句を受けていることから判断して, 区別されていなかったと考えられる。

- (15) a. and destroyede *manye* of the Cristene men (VI 26. 3)
- b. After gon men be *many* cytees and townes (XVI 110. 9)
- c. and *meche* also of lignum aloes; (VIII 41. 22)
- d. the Sarazines don *moche* reuerence to that temple, (XI 62. 6)
- e. and mochel of lignum aloes and moche grauelle of gold (XXXIII 220. 33)
- f. In that lond is fulle *mochelle* wast, (XXL 144. 26)

2.3.4. Sum, ony

Sum は異形(som, some, somme, summe)を含めて152例, ony は1例の異形 onye を含め145例が用いられていて, 両者の生起頻度はほぼ等しいが, 特徴はかなり異なる。

第一に, som(m)e の語尾 -e は, 決定詞であれ代名詞であれ, (16a, b) のように90%以上の例において複数に対応し, 単数に対応する (16c) のような場合はわずか3例にすぎない。

- (16) a. *summe* bestes han gode meetynge
‘some beasts have good meeting’ (XVIII 122. 16)
- b. and *somme* gon to Naples, somme to Rome (VIII 39. 21–22)
- c. and alondy at *somme* hauen of Grece,
‘and arrive at a haven of Greece,’ (XIV 91. 3)

一方, onye の語尾 -e は(17a)の1例を除いて付加されることではなく, 他の144例では無語尾の ony が単数・複数のいずれにも対応する。ちなみに, 無語尾の ony が複数に対応する (17b) のような例はわずか8例にすぎず, しかも, このうちの5例では, (17c) のように数に関する牽引(attraction)が弱まる原因となる他の語が ony と主要語の間に介在している。その他の例では, ony はすべて (17d) のように単数に対応する。これらの事実を総合すると, 無語尾の ony は原則として単数を含意すると理解されていたと考えられる。

- (17) a. whan he will haue *onye* of hem. (VI 27. 22)
 b. withouten doyinge of *ony* dedes of armes (XXXIV 226. 26)
 c. or thei meeten *ony* contrarious thinges. (XVIII 122. 15)
 d. yif thei may haue *ony* remenant. (XVIII 125. 21)

その他に記述すべきことは、第一に、決定詞の som は単数・複数を問わず、半数以上の39例において man/men を修飾し、ony も man を26回、thing を19回修飾する外、さまざまな名詞を修飾することである。第二に、som は tyme と delle と複合し、「かつて」を意味する somtyme 'sometime' は49例、somedelle 'somewhat' は3例用いられているが、ony にはこのような複合語は一切認められないことである。第三に、som も ony も on 'one' とは共起も複合もしないことがあげられる。

2.3.5. 配分用法と one との関係

2.3.5.1. 代名詞 one の機能

One は on, o, an, a という形式で(18a, b)のような決定詞または(18c, d, e)のような代名詞として広く用いられている。

- (18) a. And at *o* syde of the emperous table sitten many philosofres (XXV 169. 1)
 b. And whan the emperour will ryde from *o* contree to another, (XXV 173. 14)
 c. and the Cristene men see but with *on*,
 ‘and the christians see but with one (eye)’ (XXIII 157. 21)
 d. euerych of hem scholde brynge him *on* of his arewes. (XXIV 164. 28)
 e. And how that it myghte be that *on* scholde chacen a m.,
 ‘And how it might be that one (christian) should chase a thou-
 sand (misbelieving men),’ (XXVIII 189. 3)

2.3.5.2. Many oon, echon, eueryon の機能

One は単独でかなり多く用いられるが、many との共起例や ech との複合例は全く見当たらない。唯一の例外として生じるのは、(19)に示した euerych と one の複合形 euerychone(1例)である。この複合語は CT には多く用いられていたが、PP では全く生じなかったものである。

- (19) and floweren *euerychone* and hire enemyes after and chaced hem,
 ‘and everyone and their enemies follow after and chased them’

(XXIV 163. 11)

2.3.5.3. ‘Many a ~’型の用法

決定詞の many(307例)の場合、(20a)のような配分用法はきわめて少なく12例(3.51%)に止まる。圧倒的に多いのは(20b)のような集合用法である。CTの場合、「many a ~」型の配分用法は全体の92.63%を占めていたことから、MTはこれとは正反対の特徴を示していることになる。また、manyはon ‘one’と共に複合もしないことから、「many a ~」に対応する‘many oon’は存在しない。

- (20) a. i. as I haue seen fulle *many a tyme*. (VII 36/29–30)
 ii. of *many a dyuerse greuous poynt* (XXXIV 228/30)
 iii. And men fynden *many tyme* harde dyamandes
 ‘And men find many a time hard diamonds’ (XVII 115/29)
 b. of *many maneres* and *dyuerse names* (XIII 86/15–16)

2.3.6. まとめ

MTにおける数量詞とon ‘one’およびa/an+数量詞との共起・複合関係は(21)のようになる。すなわち、MTでは代名詞on ‘one’と複合するのはeuerychのみであり、他の代名詞とは共起することも複合することもない。一方、「many ~」型の配分用法は若干用いられているが、euerychとechにはこの用法は認められていない。

(21)

	on	a/an + 単数名詞
many	–	+
euerich	+	–
ech	–	–
euery	–	–
som	–	–
ony	–	–

2.4. II 節のまとめ

MT の場合、対象とした 9 つの数量詞は CT および PP とは用法が異なる例が多いが、その原因が何に由来するのかについて今後検討せねばならない。2.1. から 2.3. で行った分析の結果、後期中英語の数量詞、とりわけ代名詞 one との共起および複合について、完全に一致する特徴は分析対象とした 3 つの文献には確認できなかった。もっとも、今回の分析によって、(22) に示したように、*ech* と *euery* は *oon* との複合は可能であるが、*many*, *muche*, *muchel*, *sum*, *any* にはこの可能性はないこと、*oon* と共にまたは複合しうるのは *many*, *ech*, *everych* のみであるという事実は明らかにすることができた。

(22)

	CT	PP	MT
many on	+	-	-
everichon	+		+
echon	+	+	-
euery on	-	-	-
some on	-	-	-
any on	-	-	-

III. 初期近代英語における不定代名詞と one との共起および複合

後期中英語から 200 年近くたつと、不定代名詞の意味や用法はかなり変化していることが考えられる。とりわけ、これらの変化は不定代名詞と数量詞 one との共起および複合にも影響を与えていた可能性が高いことから、今回はスペンサー (Edmund Spenser) の『妖精の女王』(Faerie Queene, 以下 FQ と略す) のうち、1590 年に刊行された Book I~III の部分とシェイクスピア (William Shakespeare) の全作品 (以下、Sh で表す) を対象に分析したい。FQ と Sh を分析対象としたのは、FQ は初期近代英語を代表する作品の一つであり、規模は CT と大差なく、また Spenserian Stanza 形式で書かれた詩は韻律に忠実であること、Sh が出現する直前に刊行されていることから、Sh との比較・対照が可能となること、などによる。なお、FQ は Hamilton (2001) 版、Sh は The Riverside Shakespeare (1974) を用いた。

3.1.1. FQ における不定代名詞

3.1.2. Each, every

Each は決定詞と代名詞のいずれにも用いられるが、決定詞の場合、(23a, b) のように one を修飾することも、(23c) のように one と複合することもできる。ただし、a + 単数名詞を修飾することはない³。Each one(2例)と複合語の eachone(5例)は行中のさまざまな位置に生じ、CT や PP のように、行末に限られるということはない。さらに、これらの句や語はいずれも「人」を表すが、このことは each man という句が全く生じないことと関係があるかもしれない。

- (23) a. But to Duess' *each* one himselfe did payne
 ‘But everyone took pains to Duess’ (I. iv. 15. 3)

b. Themselues did solace *each* one with his Dame,
 ‘Each of them took enjoyment with his mistress’ (II. ix. 44. 5)

c. Proceded, yet *eachone* felt secretly
 ‘Proceeded, but everyone felt privily’ (I. xii. 39. 7)

FQ では中英語期から存在する複合語 *eachone* に加えて、*each one* という句が新たに用いられているが、この句(=23a, b)と *eachone*(=24a~e)を比較すると、両者には明確な区別がなかったことが分かる。

一方、euery は異形の euerie(24例)を含め、179例の大半(=167例)は(25a, b, c)のような決定詞として用いられている。Euery の注目すべき点は、(25c, d)の euary one という不定代名詞句が全体の 1 割を超える19例も用いられていることである。これらはいずれも「人」を表し、行中のさまざまな位置を占め、

行末に限られることはない。しかし、FQ では *euery* は *man* を修飾することなく、*eueryone* という複合語も生じない。*Everywhere* と同じ意味の *euery/euerie where* という句は10回生じるが、複合する例は見当たらない。

- (25) a. Is not his lawe, Let *euery* sinner die: (I. ix. 47. 5)
- b. During which time, in *euery* behest (I. x. 45. 3)
- c. And *euerie* one her answerd, that too late (III. vi. 14. 3)
- d. But at these straungers presence *euery* one did hush. (II. ix. 35. 9)

次に注目すべきは代名詞用法の *euery* である。この用法は CT と PP, および現代英語には全く例がないが、MT には15例が用いられていた。FQ では *euery* の代名詞用法は(26a, b)の2例が確認できたが、なぜこのような例外的な用法が用いられているのかはよく分からぬ。なお、*euerich* という語形は全く見当たらないことから、FQ(Book I~Book III)が書かれた1590年頃までは消滅していたと考えられる。

- (26) a. Euery of which did loosely disaray
‘Each of which loosely disarrayed’ (II. v. 32. 7)
- b. And euery of them stroue, with most delights, (II. v. 33. 1)

3.1.3. Many, much, muchel

Many(220例)のほとんどは決定詞であり、被修飾語の多くは(27a)のような複数名詞であるが、単数名詞の例も少なくない。この場合、たいていの例では、(27b)のように新情報を担う *a+単数名詞* という形式をとり、(27c)のような無冠詞はまれである。一方、決定詞の *many* が *one* を修飾する例は(27d, e, f)を含め4回生じるが、*many one* は行末にくるとは限らず、また、前後に生じる名詞(句)を受けるとは限らない。すなわち、この種の句に生じる *one* は(27d, f)では *man* を表すが、(27e)では ‘*a woman*’ を表している。

- (27) a. They heard a noyse of *many* bagpipes shrill, (III. x. 43. 2)
- b. Where earely waite him *many* a gazing eye,
‘Where betimes many a gazing eye waites him,’ (I. v. 3. 2)
- c. And oft approu’d in *many* hard assay,
‘And often tested in many severe encounters,’ (II. iii. 15. 7)
- d. The groning ghosts of *many* one dismaide
‘The groaning ghosts of many men (who had been) defeated’

(I. vii. 47. 8)

- e. He nould be clogd. So had he serued *many* one.
 ‘He would not be blocked. He had treated many a woman in
 such a way’ (III. x. 35. 9)
- f. To Faery court she came, where *many* one
 ‘She came to the Fairy’s court, where many a man (admired)’
 (III. vi. 52. 7)

次に、(28)のような代名詞用法ははわずか13例に用いられているにすぎない。

(28) a. Accomplished, that *many* deare complained:

‘Accomplished (in blood), so that many men lamented grievously’ (III. ix. 42. 7)

- b. With *many* of the Gods in company, (III. vi. 49. 2)

Much(123例)の大半は副詞であり、決定詞と代名詞の例はそれほど多くはない。決定詞の much は(29a)にあげたような不加算名詞を修飾し、加算名詞を修飾する例はない。代名詞の用法は(29b)の1例のみである。なお、この much は部分属格(partitive genitive)を従える唯一の例でもある。

(29) a. blood, brightnes, desire, dismay, gold, grieve, ill, land, pitty,
 reioyce, sence, shame, speede, toule, woe

- b. Which who so wants, wants so much of his rest:

‘One who has not (his grave), has not so much of his rest’

(II. i. 59. 7)

Muchel(4例)のうち(30a, b, c)の3例は決定詞として用いられていて、muchel と同様の意味を有し、不加算名詞を修飾している。(30d)は副詞として用いられた唯一の例である。

(30) a. Oft tempred is (quoth she) with *muchel* smart:

‘(little sweet) is often tempered (she said) with much smart’

(I. iv. 46. 4)

- b. He had in armes abroad wonne *muchell* fame,
 ‘He had won much fame in battles abroad,’ (I. vi. 20. 5)
- c. He did engrauie, and *muchell* blood did spend,
 ‘He cut deeply, and spent much blood,’ (III. vii. 32. 7)
- d. But minds of mortal men are *muchell* mard,
 ‘But minds of mortal men are much corrupted,’ (III. x. 31. 8)

3.1.4. Some, any

Some(148例)の場合、決定詞は(31a, b)のように単数・複数いずれの名詞(句)も修飾する。Someに修飾される単数名詞は(31c)のような不加算名詞が圧倒的に多く、加算名詞はbeast, hand, knight, nestなどの一部の名詞に限られている。したがって、someに修飾される複数名詞は少なく、(31d)のような語に限られる。注目に値するのは(31e)のsome oneである。数量詞someが不定代名詞oneを修飾するのはこの1例のみであるが、後期中英語には全く見られなかつたものである。なお、something, som(e)time(s), som(e)what, somewhyleのように、som(e)が名詞や疑問詞などと複合する例が少なからず生じるが、someがoneと複合する例はFQには存在しない。

- (31) a. *Some secret sorrow did her heart distraine:*

‘Her heart did afflict some secret sorrow.’ (I. vii. 38. 4)

- b. *Tell me some markes, by which he may appeare,* (III. ii. 16. 3)

c. care, chaunce, comfort, compassion, displeasure, ease, enchauntment, end, extasye, hope, ill, labour, life, light, melancholy, misfortune, mishap, payne, perill, refuge, security, sorrow, vengeaunce

- d. deeds, enchauntments, knifes, men, markes, play-fellows

- e. *The whiles some one did chaunt this louely lay;*

‘During the time someone did chant this lay of love,’

(II. xii. 74. 1)

一方、代名詞用法のsomeのほとんどの例は(32a)のように単独で主語として機能していて、(32b)のようにof属格を従える用法は3例にすぎない。

- (32) a. *Some wrestle, some do run, some bathe in christall flood.*

(I. xii. 7. 9)

- b. *Where we must land some of our passengers,* (I. xii. 42. 3)

Anyはsomeの半分以下の66例であるが、someとは異なる特徴も認められる。決定詞のanyが修飾する複数名詞は(33a, b)に示したmeetingsとmeansのみであり、しかもmeansはしばしば単数扱いされる。一方、単数名詞は(33c)のような加算名詞と、(33d)のような不加算名詞が数多く用いられている。注目すべきは、後期中英語には生じなかつたanyがoneを修飾する例が(33e, f)の2回用いられていることである。ちなみに、FQではanyは他のいかなる語とも複合することはない。

- (33) a. Of knights and ladies *any* meetings were, (III. x. 19. 8)
 b. Ne *any* euill meanes she did forbear (II. iv. 5. 8)
 c. beast, bird, cace, knight, marke, port, mote, member, place,
 puffe, starr, thing, woman
 d. breach, filth, might, noise, rest, reskew, skill, strength, witt
 e. Yet was there not with her else *any* one (II. vi. 3. 5)
 f. Not that she lusted after *any* one;
 ‘Though she did not desire any particular person’ (III. ii. 23. 7)

3.1.5. 配分用法と one との関係

3.1.5.1. 代名詞 one の機能

One は決定詞のみならず、代名詞としても広く用いられていて、その大半は(34a, b, c)のように照応関係のある支柱語であるが、(34d)のような照応関係のない場合も少なくない。

- (34) a. What wonder then, if *one* of women all did mis?
 ‘What wonder (there would be) then, if one of all women did
 err?’ (III. ix. 2. 9)
 b. Yet she loues none but *one*, that Marinell is hight.
 ‘But she loves none except one, who is called Marinell.’
 (III. v. 8. 9)
 c. That haue three years sought *one*, yet no where can her find.
 ‘Who have sought one (=Gloriana) for three years, yet nowhere
 can find her.’ (II. ix. 38. 9)
 d. *One* knocked at the dore, and in would fare;
 ‘Someone knocked at the door, and would go in’ (I. iii. 16. 4)

3.1.5.2. Many one, each one, euery one, some one, any one の機能

FQ では one を修飾する不定代名詞の種類と数が後期中英語の作品の場合よりかなり増加している。Everich の消滅に伴い, everichoон は用いられなくなつたものの、従来の each one, many one の外に、any one, some one, euery one が新たに加わった。しかしながら, some の場合, som(e)thing, som(e)time(s), som(e)what, somewhile という複合語が発達しているにもかかわらず, som(e) は one とは複合しない。同様に、many, euery, any も同様に one とは複合

しない。ただし、後期中英語で用いられていた複合語 eachone は5例も用いられている。もっとも、複合語の eachone と句の each one が区別されていたかどうかは分からない。

3.1.5.3. ‘Many a ~’型の配分用法

‘Many a ~’型の配分用法は旧来の‘many a ~’に限られ、他の不定代名詞は a + 単数名詞を修飾することはない。

3.1.6. まとめ

FQ では euerych は生じないが、その他5種類の数量詞はすべて(35)に示したように one と共に起する。ただし、one と複合するのは中英語期以来の eachone のみである。一方、5つの数量詞のうち a/an + 単数名詞を修飾するのは many のみであり、each にはこの機能はなくなっている。Euerych が生じないことから、‘euerych a ~’という配分用法も生じない。

(35)

	one	a/an + 単数名詞
many	+	+
euerych		
each	+	-
euery	+	-
some	+	-
any	+	-

3.2.1. Sh における不定代名詞

Sh の場合、1590年のFQより時代が新しいことと、すべての作品を分析対象としたことから、one を主要語とする不定代名詞の例はかなり多く得られそうである。分析の焦点は、中英語期以来の eachone と many one の生起頻度は減少しているか否か、FQ で新たに用いられた不定代名詞句 each one, every one, any one, some one は増加傾向にあるか否か、などにある。

3.2.2. Each, every

Sh の each の特徴は、代名詞よりも決定詞の用法の方がかなり多いこと、FQ では皆無であった(36a)のような each man は14例も用いられ、しかも、これ

と同じ意味の *each one* も (36b) を含め 17 回用いられていて、両者はほぼ同じ頻度で生じること、さらに、中英語期以来用いられ続けてきた *eachone* という複合語は全く生じないことから、この頃までに消滅したと考えられることがある。

- (36) a. Free pardon to *each man* that has denied (H8 I. ii. 100)
 b. Cannot pick out five such, take *each one* in his vein. (LLL V. ii. 545)

Each の代名詞用法の例は決定詞の用例と比べれば少ないが、単独で主語として用いられる (37a) のような例と、*of*-属格を従える (37b) のような例が多い。

- (37) a. *Each* hath his place and function to attend: (1H6 I. i. 173)
 b. In that *each of you* have forsworn his book, (LLL IV. iii. 293)

一方、*every* はきわめて多く用いられ、とりわけ決定詞の用例は 599 例に達するが、代名詞用法は (38) の 2 例のみである。FQ の 2 例と同様、現代英語では認められていないこのような例がなぜ生じるのかは不明である。

- (38) a. And after, *every of this happy number*, (AYL V. iv. 172)
 b. If *every of your wishes* had a womb, (ANT I. ii. 38)

決定詞の *every* のうち注目に値するのは *one* を修飾する (39a) のような例 (= 62 例) と、*man* を修飾する (39b) のような例 (= 67 例) がほぼ等しい頻度で用いられていて、この *one* の大半が人を表すことである。この特徴は *each* の場合と似ている。副詞句の *every where* (24 例) は好んで用いられるが、*every one* と同様、(39c) のように複合することはない。

- (39) a. Good husband, let us *every one* go home, (WIV V. v. 241)
 b. For *every man* hath business and desire, (HAM I. v. 130)
 c. It is to live abroad, and *every where!* (TNK II. ii. 98)

3. 2. 3. Many, much

Many の決定詞の用法で興味深いのは、CT や FQ で用いられていた *many one* が全く用いられておらず、消滅してしまった可能性が高いこと、その一方で、*many a one* という新たな形式が 4 例用いられていることである。この形式は、とりわけ形容詞を介在させない (40a, b, c) は、中英語はもとより現代英語でも一般に用いられるではない。*Many a one* という形式が *such a one* と並んで重要なのは、FQ では *one* の前の不定冠詞が規則的に *an* となっていたのに対して、Sh の場合には 2 例を除いて *a* のみが生じることから⁴、*one* の

初頭音(onset)が子音になっていた決定的な証拠となるからである。

- (40) a. Hath widowed and unchilded *many* a one, (COR V. vi. 151)
- b. "This you may loose, not me," and *many* a one; (TNK IV. i. 91)
- c. Of folded schedules had she *many* a one, (LC 43)
- d. Of *many* a bold one, whose kinsmen have made suit
(CYM I. v. 71)

Much には注目に値する特徴は認められないので記述を省略する。

3.2.4. Som, any

決定詞の some はさまざまな名詞や代名詞を修飾するが、その詳細は、(41a)のように one を修飾し、some one となるのが 7 例、(41b)のように one が複数形となるのが 1 例、(41c)のように man を修飾するのが 7 例、some が man の複数形を修飾するのは 8 例である。一方、some は something(188 例)、sometime(97 例)、sometimes(60 例)、somewhat(18 例)のように、名詞などと複合した例がきわめて多く用いられ、しかも、some one, some man と同じ意味を表す複合語 somebody も(41d)のように 8 例用いられている。それにもかかわらず、some が one または man と複合した例は全く生じない。

- (41) a. to understand him, unless some one among us, (AWW IV. i. 5P)
- b. let's have some merry ones. (WT IV. iv. 287P)
- c. to some man else, (3H6 II. v. 60)
- d. somebody call my wife. (WIV IV. ii. 116P)

次に、any の場合、(42a)のように body を修飾するのが 4 例、(42b)のように両者が複合したのが 2 例生じるが、これらと同じ意味を表す(42c, d)のような any one が 11 例も生じるにもかかわらず、any と one が複合した例は全く生じない。なお、(42e)の any mortal body のように any と body が形容詞によって分断されていても、body は「人」の意味を担っているのは興味深い。

- (42) a. If there be *any* body in the house, (WIV III. iii. 233P)
- b. Cough, or cry "hem," if *anybody* come. (OTH IV. ii. 29)
- c. Doth *any* one accuse York for a traitor? (2H6 I. iii. 179)
- d. First, never to unfold to *any* one (MV II. ix. 10)
- e. As *any* mortal body hearing it
Should straight fall mad, or else die suddenly.
(TIT II. iii. 103-4)

3.2.5. 配分用法と one の機能

3. 2. 5. 1. 代名詞 one の機能

代名詞の one は、(43a, b)のように照応関係がなく、単独で ‘people in general, someone’ という不定の意味を表す場合や、(43c, d)のような支柱語となる例はもとより、(43e)のように ‘my dear one’ を表す dummy head などの用法も見られる。

- (43) a. If I have horns to make one mad, let the proverb go with me:
(WIV III. v. 151P)

b. Nay, not as *one* would say, healthy; (MM I. ii. 55P)

c. I will in the interim undertake *one* of Hercules' labors,
(ADO II. i. 365P)

d. A stage, where every man must play a part, And mine a sad
one. (MV I. i. 79)

e. (Of thee my dear *one*, thee my daughter), who (TMP I. ii. 17)

3. 2. 5. 2. Many one, echorule

シェイクスピアでは‘many a ～’型の配分用法は残っているが、FQと同様、‘each a ～’型は存在しないことから⁵、この型の配分用法はすたれてしまったものと思われる。中英語期以来の many one という句や eachone という複合語は全く見当たらぬことから、すでに消失してしまったと思われる。これらに代わって、one を主要語とする every one, some one, any one という不定代名詞句が新たに用いられているが、everyone, someone, anyone という現代英語では一般的な複合不定代名詞は全く生じない。

(44)

	one	a + 単数名詞
many	-	+
euerich		
each	+	-
every	+	-
some	+	-
any	+	-

3.3. Ⅲ節のまとめ

FQは中英語期から受け継いだ複合語 eachoneとmany oneという句を維持し、しかも、oneの初頭音は規則的に母音である点は中英語と同じであるが、every one, some one, any oneという句を新たに用いている点は中英語とは異なる。Shはeachoneなどの複合不定代名詞を全く用いないこと、旧来のmany oneに代わってmany a oneという配分用法を新たに導入したこと、oneの初頭音がほぼ規則的に子音となっている点において、FQや中英語とは異なる特徴を示している。

(45)

	FQ	Sh
many one	+	-
eachone	+	-
each one	+	+
every one	+	+
some one	+	+
any one	+	+

IV. 全体のまとめ

現代英語の場合、数量詞 any, each, every, many, some は代名詞 one と句や複合語を形成しうるが、その通時的形成過程は単純なものではない。すなわち、(46)に示したとおり、中英語後期に one を修飾できたのは many のみであり、one と複合できたのは everich と each にすぎない。初期近代英語期になると、すでに消滅したと思われる everich 以外のすべての数量詞は one を修飾することができたが、複合不定代名詞は中英語期から引き継いだ eachone のみである。それすら Sh では消滅してしまっている。FQ は eachone という複合語と many one という句を用いる点、および、one の初頭音に子音を用い点において Sh より古く、中英語に近い特徴を示す。一方、Sh は eachone と many one を用いない点、および one の初頭音を子音化している点において現代英語に近い特徴を示しているといえるが、数量詞と one の複合語を全く用いない点において、FQ と同様、現代英語とは大きく異なる。それにしても、初期近代英語期に新たに生じた one を主要語とする 4 つの不定代名詞句(any one, each one, every one, some one)から現代英語の複合不定代名詞 anyone,

everyone, someone が発達してくるが、なぜ each one はこの複合化の過程に加わらなかったのであろうか。この疑問を別な角度から見てみよう。Eachone は中英語から初期近代英語にかけて複合不定代名詞の中では最も長く用いられた。それにもかかわらず、現代英語において anyone, everyone, someone という新たな複合不定代名詞が出現しても、復活することがなかったのはなぜであろうか。これら二つの大きな疑問は each という代名詞の意味と用法、具体的には every との競合に収束すると思われるが、この検討は今後の課題といい。

(46)

	CT	PP	MT	FQ	Sh
everichon	+		+		
eachon	+	+	-	+	-
each one	-	-	-	+	+
many one	+	-	-	+	-
every one	-	-	-	+	+
some one	-	-	-	+	+
any one	-	-	-	+	+

注

*本稿は近代英語協会第23回大会（平成18年5月19日、名古屋大学）での研究発表「英語の数量詞と one の結合と共にについて」に加筆したものである。

- 1 これらの代名詞句は音形と意味において複合代名詞とは異なり、それぞれ 'any single (person or thing)' 「だれでも一人(の), どれでも一つ(の)」, 'each one' 「どれもこれも (ことごとく)」という意味を表す(Swan(1995:550), Pearsall (1998))。

- 2 その他, Schmidt(1995)も適宜参照した。

- 3 ちなみに、次の2例は each + 単数名詞から成る句のように見えるが、each と a + 単数名詞は同じ統語単位を形成してはいない。

Themselves to court, and each a damzell chose:

'(They began) to seek (their) favour, and each (of them) chose his lass,'

(II. ix. 36. 5)

And vnto each a Bulwarke did arrett,

'And committed one fortification in charge to each (troop),'

(II. xi. 7. 3)

- 4 次の 2 例は such an one となっていることから、これら 2 例に関する限り、one の初頭音は母音であるといえる。
- Than such an one to reign. (MAC IV. iii. 66)
 The man from Sicyon—is there such an one? (Ant I. ii. 114)
- 5 ちなみに、次の 2 例は each a + 単数名詞から成る句のように見えるが、each と a + 単数名詞は同じ統語単位を形成してはいない。
- Divide me like a bri'b'd-buck, each a haunch.
 'Divide me like a cut-up deer, each (of me like) the hip.' (WIV V. v. 24P)
 We shall have each a hundred Englishmen.
 'Each of us shall have a hundred Englishmen.' (H5 III. vii. 157)

参考文献

- Baugh, Albert Croll, ed. (1963) *Chaucer's Major Poetry*, Prentice-Hall, New Jersey.
- Benson, Larry D., ed. (1987) *The Riverside Chaucer*, Houghton Mifflin, Boston.
- Benson, Larry D., ed. (1993) *A Glossarial Concordance to the Riverside Chaucer* 1, Garland Publishing, New York & London.
- Declerck, Renaat (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.
- Evans, G. Blakemore, ed. (1974) *The Riverside Shakespeare*, Houghton Mifflin, Boston.
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) (1991) 「'many a ~'の用法と起源」『英語青年』136卷12号。
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) (2004a) 「通時的英語研究の問題：韻文か散文か」『言語文化論集』65号。
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) (2004b) 「集合数詞 many の歴史的発達」『近代英語研究』20号。
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) (2006) 「『カンタベリ物語』の不定代名詞」『文藝言語研究』49号。
- Hamilton, A. C., ed. (2001) *The Faerie Queene*, Pearson Education, Edinburgh Gate.
- Kaga, Nobuhiro (加賀信広) (1997) 『指示と照応と否定』(日英比較選書 4) 研究社, 東京。
- Kane, George and E. Talbot Donaldson, eds. (1988) *Piers Plowman: The B Version*, The Athlone Press, University of California Press.
- Kurath, Hans, Sherman M. Kuhn, Robert E. Lewis, et al. eds. (1952–2001) *Middle English Dictionary*, University of Michigan Press, Ann Arbor.
- Mustanoja, Tauno Frans (1960) *A Middle English Syntax*, Société Néophilologique, Helsinki.
- Oizumi, Akio and Kunihiro Miki, eds. (1991) *A Complete Concordance to the Works of Geoffrey Chaucer* X, Olms-Weidemann, Hildesheim, Zürich, New York.

- Pearsall, Juddy, ed. (1988) *The New Oxford Dictionary of English*, Clarendon Press, Oxford.
- Rissanen, Matti (1967) *The Uses of One in Old and Early Middle English*, Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki XXXI, Société Néophilologique, Helsinki.
- Seymour, M. C., ed. (1967) *Mandeville's Travels*, Oxford, Clarendon Press.
- Skeat, Walter William, ed. (1984) *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, Clarendon Press, Oxford.
- Spevack, Marvin, ed. (1973) *The Harvard Concordance to Shakespeare*, George Olms, Hildesheim.
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, New York.
- Wittig, Joseph S., ed. (2001) *Piers Plowman: Concordance*, The Athlone Press, London & New York.
- Yamashita, Hiroshi, et al., eds. (1990) *A Comprehensive Concordance to The Faerie Queene 1590*, Kenyusha, Tokyo.

[本稿は平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「英語の不定代名詞の通時的研究」（研究代表者：藤原保明，課題番号：17526317））の交付を受けて行われた研究成果の一部である。]